

# 他者への情熱、暴力という希望 —鈴木道彦著『アンガージュマンの思想』『政治暴力と想像力』を 読む—

## The Passion to the Others, The Wish of the Violence: Reading “*The Thought of Engagement*”, “*The Political Violence and The Imagination*” by Michihiko Suzuki

岩瀬 みゆき

IWASE MIYUKI

東京外国語大学大学院博士前期課程

Tokyo University of Foreign Studies, master's student

*Quadrante*, No.20 (2018), pp.143-151.

### 目次

はじめに

1. 本書の構成

2. 李珍宇を探して

3. フランツ・ファノンと金嬉老、あるいは世界を変革する  
試み

結論

### はじめに

本稿で取り上げる2冊の書物、『アンガージュマンの思想』と『政治暴力と想像力—鈴木道彦評論集—』は、それぞれ1969年、1970年に刊行された<sup>1</sup>。両者は、「フランス文学者」<sup>2</sup>鈴木道彦（1929年～）が1950年代後半から1960年代後半にかけて発表した論考を纏めたものであり、著者の第一、第二評論集として2冊に分かれていながらも、相互に補完しあい、およそ10年にわたる著者の思想の軌跡を読者に指し示している。著者は、「単に研究上の必要などといったものを超えて、絶対的な

価値を帯びたものと映っていた」<sup>3</sup>フランスに、1954年9月から1958年4月に最初の留学をする。さらに1968年4月から1969年3月まで再度フランスに留学し、最初の留学ではアルジェリア戦争に、2回目の留学では5月革命に対峙した。

こうして著者は1950年代と1960年代のフランス体験を通して『アンガージュマンの思想』と『政治暴力と想像力—鈴木道彦評論集—』を生み出した。留学前の著者は、「フランス文学を専攻しながら、植民地のことはまったく念頭になかった」<sup>4</sup>にもかかわらず、最初の留学のあいだに、パリで「民族解放戦線（FLN）」に属する人々とその支持者たちを直接知ることによって、「民族」と「植民地」の問題を自らの議論の射程に入れた。かくして、フランスから帰国した著者は、「第三世界」を主題とする評論を次々と発表していく。このような問題意識は、「他者」への関心を増大させ、日本における民族問題、すなわち「在日朝鮮人」をめぐる課題へと向かう契機となった。さらに著者は、アルジェリア戦争を同時進行的に追跡していく過程で、フランツ・ファノンを発見する。著者はファノンの議論のなかに、植民地の抑圧・被抑圧の関係性は

<sup>1</sup> 鈴木道彦『アンガージュマンの思想』（晶文社、1969年）、『政治暴力と想像力—鈴木道彦評論集—』（現代評論社、1970年）。

<sup>2</sup> 鈴木によれば、「フランス文学者」の自称には「いささか公認のフランス文学者に対する異議申し立て」と「私が一旦西ヨーロッパという迂路を経なければならなかったこと、今なおそれに深くかかわっていることの意味」が含まれている。『アンガージュマンの思想』、419頁。

<sup>3</sup> 鈴木道彦『異郷の季節 新装版』（みすず書房、2007年）、6頁。

<sup>4</sup> 鈴木道彦『越境の時 1960年代と在日』（集英社、2007年）、26頁。



個人の意思を超えるものであり、民族に根ざしていることを読みとった。たとえ被植民者に善意を持つ植民者であっても、「コロンである以上は抑圧する側の一員に組み込まざるを得ない」<sup>5</sup>がゆえに、植民地統治以後の「民族責任」から遁れることは出来ない。

1965年には、韓国、日本の双方で日韓基本条約の締結、批准への反対運動が起きたが、日本側では、過去の植民地支配の清算について論じられることは少なかった。しかし日本朝鮮研究所や一部の歴史学者たちの努力、あるいは民族団体である在日本大韓民国居留民団、在日本朝鮮人総聯合会による在日朝鮮人の「法的地位」をめぐる積極的な議論の成果として、一般の日本人の間にも大韓民国と「在日朝鮮人」への関心が高まる。同時期のベトナム反戦運動では、日米安保条約を介してアメリカの戦争を支える日本国家が批判されるとともに、国家の戦争協力の帰結として、必然的に市民も戦争に加担する「加害」の構造に焦点が当てられた。こうして市民が戦争被害者であると同時に戦争加害者となる二面性に目を見据えることで、市民の戦争責任を問う視座が出現し、戦争への「加害」を市民に強制する国家の権力状況が照射された。そして、1970年前後に始まった出入国管理法制定に反対する「入管闘争」が、アジアへの問題意識を再び浮上させる。そこでは、在日外国人という「他者」たちが、日本人の植民地主義や日本社会の差別構造を告発し、無意識の植民地主義、差別意識をいかに克服するか、という課題を日本人に突きつけることになった<sup>6</sup>。

同時代の社会運動の課題意識を共有していた著者は、日本人が加害民族であるという認識枠組みを提示し、自己と「他者」との境界が個人の意思では超えられないことを自覚しながらも、それを乗り越える可能性を模索した。そして、「民族」、「植民地」、「他者」への関心は、構造化された「暴力」の探究に繋がった。そもそも植民地は、暴力によって成立し、維持されるシステムである。植民地支配を終焉させるためには、暴力を手段とす

るしかないがゆえに、著者は非暴力を内在する暴力を肯定し、暴力と非暴力が二項対立的に配される構図を斥ける。さらに著者は、戦争や植民地に組み込まれた暴力のみならず、民主主義体制下の暴力を暴き出し、非暴力主義を掲げながら暴力を行使する同時代の権力機構を批判していく<sup>7</sup>。

ヨーロッパの体験を通して日本社会の批判者となることは、日本の知識人のなかでは必ずしも珍しくはない。例えば、「フランス文学者」渡辺一夫も、その議論の基調をヨーロッパと日本の比較に置いた一人である。1931年から1933年にかけて、国費留学生としてパリで生活した渡辺は、日本への帰国を「すべてが失われた」<sup>8</sup>と表現している。帰国後の渡辺は、西洋中心主義の視座のもとに日本社会の表層的な近代化を批判し、その跛行的な行き方に警鐘を鳴らし続ける国内亡命者となった。こうした知識人たちと著者を分かつものは、フランスでの体験を通して西洋中心主義の否定にまで達した点にある。「彼岸である西欧の文化を真の他者」<sup>9</sup>となし得た著者の議論は、ヨーロッパに比べて「遅れた」日本社会に対する感慨でもなければ、残存する封建制の遺構を数え上げることでもない。それは社会の改良を志向するのではなく、社会変革を視野に入れたものであり、既成秩序を転倒させ、世界の再構築へと進むことを目指していた。

パリでアルジェリア戦争と向き合った著者は、植民地支配、独立戦争などの政治課題を論じつつ、日本の民族問題を検討していく過程で、戦前、戦後にまたがる日本社会の植民地主義を問い直すことへの回路を拓いた。そこでは、自らを抑圧民族の側に位置づける、という接近方法によって植民地主義が検討された。著者の議論は「他者」の視点から立論されることで、「他者」の犠牲を基盤とする植民地主義を否定し、「われわれ」と「他者」が同じ地平に並び立つ可能性を探る。それは半世紀を遡る言説でありながら、植民地支配を被植民者の側から捉えなおす、日本における最も初期の

<sup>5</sup> 同書、45頁。

<sup>6</sup> 道場親信「ポスト・ベトナム戦争期におけるアジア連帯運動—「内なるアジア」と「アジアの中の日本」の間で」『岩波講座 東アジア近現代通史 第8巻 ベトナム戦争の時代 1960—1975年』（岩波書店、2011年）、100-107頁。

<sup>7</sup> 民主主義体制と暴力との相関関係を論じたものとして、李珍宇、金嬉老に関する所論のほか「羽田事件」を主題とした一連の論考が挙げられる。「民主主義のなかの暴力」『政治暴力と想像力—鈴木道彦評論集—』（現代評論社、1970年）、6-29頁など同書第1部に所載。

<sup>8</sup> 渡辺一夫「滞仏日記（1931—1933）—ミスタ・チャンの話—」『渡辺一夫著作集 10 偶感集上巻』（筑摩書房、1970年）24-25頁。執筆は1933年8月。

<sup>9</sup> 『アンガージュマンの思想』、322頁。

言説として評者を引きつけるのであり、植民地主義を考えていくうえでの導きの糸ともなっている。以下、本書の内容を紹介しながら、1960年代の著者の議論が持つ意義を追求してみたい。

## 1. 本書の構成

『アンガージュマンの思想』は、第1部「ブルーストからサルトルへ」、第2部「第三世界・ナショナリズム・暴力」という構成で、分量的には、第2部が第1部の倍を占めている。第1部のIには、1959年、1966年に書かれたブルーストに関する2本の論文、IIには、1962年から1965年の間に書かれた6本のサルトル論が並ぶ。第2部には、1958年から1968年までに書かれた16の論考が配される。そのIにはアルジェリア戦争に関する7本の論考、IIには、中野重治の転向を「文学のアンガージュマンとは何か」<sup>10</sup>という視点から分析した論文、天皇制をめぐる今日的な課題を井上光晴の戯曲『死者の時』の上演を通して論じた劇評、竹内実著『日本人にとっての中国像』の書評が収められている。IIIは、アメリカの黒人問題を主題とする論考、日本人の「民族責任」を論じた2本の論考と小松川事件に焦点を当てた2本の論考、そしてフランツ・ファノン論を収録している。「あとがき」によれば、本書に収められた個々の論考は、2回のフランス留学に挟まれた約10年の間に書き進められた<sup>11</sup>。

これに対して『政治暴力と想像力—鈴木道彦評論集一』に所載された15の論考は、2回目のフランス滞在を間に挟む、1966年から1969年までの3年間に執筆されたものである。4部に収録された3本の作品を除いて、すべての作品が1967年10月の羽田闘争以後に書かれたことが「あとがき」では強調されている<sup>12</sup>。本書は4部に分かれており、第1部は羽田闘争を扱った4本の論考を収録する。第2部には、5月革命を論じる2本の論考、アルジェリア、ベトナム戦争の「脱走兵」と脱走支援組織を取り上げた論考、これら3本の論考が配された。第3部はフランツ・ファノン論と金嬉老事件に関連した2本の論考を置く。第4部には書評、

講演、来日したサルトルを取り上げた文章、『新日本文学』に掲載された著者批判への反駁文、1967年のアジア・アフリカ作家会議に即して『新日本文学』を批判した文章、これら5本の文章が並ぶ。第1部から第3部まで一貫した主題を持つ本書に対して、『アンガージュマンの思想』は、10年という執筆期間の長さを反映してより広範な主題を扱っている。本稿において、このような主題のすべてを論じることは不可能であるため、評者の問題関心から「植民地」と「他者」に焦点を当てて論じたものを選び、検討していくことにする。その対象は李珍宇、フランツ・ファノン、金嬉老という3人の「他者」を論じた作品である。

## 2. 李珍宇を探して

1958年8月に起きた小松川事件では、同一犯人が2人の日本人女性を殺害したとされるが、犯行を自白したのは当時18歳の在日朝鮮人の少年李珍宇であった。著者は「すべての死刑に反対するのが正しいと信じる立場から」減刑嘆願書に署名はしたものの、事件当時には李珍宇本人に関心を持つことはなかった<sup>13</sup>。こうした態度は、10年後の金嬉老事件における行動とは大きく異なるものである。1968年2月、フランス留学を目前に控えた著者は事件当日から金嬉老事件に関わり、3月に結成された弁護団と「金嬉老公判対策委員会」への参加を決定して、フランスに出発した<sup>14</sup>。著者が小松川事件の「思想的な意味」<sup>15</sup>を考え始めたのは、李珍宇が殺された翌年であり、それは李珍宇と朴寿南の往復書簡『罪と死と愛と』が与えた衝撃によるものであった<sup>16</sup>。すなわち著者は、書簡に表された李珍宇の精神に魅了されていた。

こうして著者は、講演<sup>17</sup>や日朝関係を主題とした論考<sup>18</sup>のなかで小松川事件について言及し始め

<sup>10</sup> 同書、424頁。

<sup>11</sup> 同書、419-420頁。

<sup>12</sup> 『政治暴力と想像力—鈴木道彦評論集一』、283頁。

<sup>13</sup> 同書、55頁。なお、鈴木が「嘆願書の文章に全面的に賛成したわけではない」という減刑嘆願書の発起人は、上原専祿、幼方直吉、大岡昇平、木下順二、高木健夫、旗田巍、羽生英敏、三宅艶子、吉川英治、渡辺一夫。

<sup>14</sup> 『越境の時 1960年代と在日』、150-172頁。

<sup>15</sup> 同書、370頁。

<sup>16</sup> 朴寿南編『罪と死と愛と』（三一書房、1963年）。

<sup>17</sup> 「文学と社会科学の接点」『政治暴力と想像力—鈴木道彦評論集一』、223-250頁。1966年5月13日一橋大学小平祭における講演に加筆。

<sup>18</sup> 「民族の責任Ⅱ」『アンガージュマンの思想』、357-365頁。初出は『一橋新聞』（1965年12月15日）。

た。李珍宇を主題とする2本の論考として、『アンガー・ジュマンの思想』に収録された「否定の民族主義」<sup>19</sup>と「日本のジュネーまたは他者化した民族」<sup>20</sup>があり、『政治暴力と想像力—鈴木道彦評論集—』には、李珍宇を主題とする文章は収録されていない。なお、『アンガー・ジュマンの思想』と『政治暴力と想像力—鈴木道彦評論集—』に未収録の論考として「悪の選択」が存在する。この作品は1966年10月に執筆された後、著者のゼミの学生たちが作った雑誌に寄稿されたもので、2007年刊行の『越境の時 1960年代と在日』に再録された。著者は、民族と文学の二つの側面から李珍宇に接近しながら、小松川事件を民族問題のなかにどのように位置づけるべきか、李珍宇自身にとっても動機が「わからない」、そのような犯罪に至る過程を文学的視座によっていかに読み解いていくのか、異なる二つの視点を交錯させながら、著者独自の李珍宇像を構築している。

「否定の民族主義」は著者が李珍宇と小松川事件を扱った最初の文章である<sup>21</sup>。これは「アジア・アフリカの民族主義と日本」のテーマで依頼された原稿であったため、著者は冒頭で「多少依頼者の意図と外れるかも知れぬ」<sup>22</sup>と断りながら、本論の主題として李珍宇を挙げる。そして、李珍宇が朴寿南にあてた書簡『罪と死と愛と』から引用し、拘置所のなかで、死を覚悟しつつも「たどたどしく朝鮮語を習い覚えていく」李珍宇の姿を読者に指し示す。すなわち李珍宇は、「朝鮮語を知らない多くの朝鮮人の一人」であった。しかしながら、死を目前にして朝鮮語を学習する李珍宇が、民族意識に目覚めていたわけではない。

『罪と死と愛と』に見られる李珍宇と朴寿南の民族意識はきわめて対照的である。朴寿南は祖国や民族をポジティブな前提とするが、李珍宇にとってそれは否定すべきものであり、彼の犯罪や悪の「本性」を説明するために提示される概念であった。この否定性については、「日本のジュネーま

たは他者化した民族」においてさらに分析が進められた。他者化した朝鮮人という条件を内面化した李珍宇は、自らを否定して悪へと傾斜し、罪を犯して死刑囚とならねばならなかった。李珍宇は死刑囚であることを「朝鮮人であるという独特のあり方」として認識しており、その生涯をかけて祖国や民族への否定性を貫いた<sup>23</sup>。このような李珍宇の否定性は、「私たち日本人」が作り出されながらも、他方、アジア・アフリカの民族主義の否定性と、軸を一にするものであった。アジア・アフリカの民族主義は西洋ナショナリズムを否定するナショナリズムであり、この否定性には現代史を作り変える契機が内包されている。

「日本のジュネーまたは他者化した民族」は、『新日本文学』の「悪の選択」掲載依頼に応じられたかたちでその全文を書き改めたうえ、同誌に掲載された<sup>24</sup>。この論考は5節からなるが、まず1節で著者は、在日朝鮮人問題としての小松川事件の重要性を明示し、李珍宇の「犯罪の意味」を明らかにすることを本稿の目的として掲げる。李珍宇は、サルトルが「天才とはその生の条件を果てまで生きぬくという不動の意志と一体をなしている」という意味での「天才」であった。2節では、社会構造化された差別は個人の意思の在り方とは無関係に作用するのであり、日本人の存在がなければ、朝鮮人差別も存在しないことが述べられる。李珍宇の二重に他者化された主体は、こうした社会状況のなかで形成された。3節では、想像のなかに現実を逆転させる自由を見出すことで、李珍宇の犯罪が生れたという解釈が示される。李珍宇は、在日朝鮮人に烙印された「悪」を想像の世界に転化させ、殺人を「容易になし得る本性」を作り上げた。4節では、李珍宇の「否定の民族主義」が説かれ、失われた主体性の回復を求めて罪を犯すことで、李珍宇が在日朝鮮人としての自己を再発見したことが述べられる。5節では、2節から4節までの議論を踏まえて、李珍宇の挫折した人生の意味が語られる。李珍宇の「非情な本性」を作り出したのが日本人であるにもかかわらず、李珍宇は日本人を告発することなく、自らの責任のみを語ることによって日本人を否認した。著者は、日本の植民地主義が生み出した李珍宇とヨーロッ

<sup>19</sup> 「否定の民族主義」『アンガー・ジュマンの思想』、366-369頁。初出は吉本隆明編『現代日本思想体系 第4巻 ナショナリズム』月報（筑摩書房、1964年）。

<sup>20</sup> 「日本のジュネーまたは他者化した民族」『アンガー・ジュマンの思想』、370-388頁。初出は『新日本文学』（1967年2月）。

<sup>21</sup> 『越境の時 1960年代と在日』、67頁。

<sup>22</sup> 同書、366頁。

<sup>23</sup> 『アンガー・ジュマンの思想』、380-383頁。

<sup>24</sup> 同書、430頁。

パの資本主義が生んだジャン・ジュネを等置しつつ、想像力、すなわち現実の否定に由来する李珍宇の犯罪が「文学であるべき性質」を持っていたことを指摘する。

著者は1963年に『サルトルの文学』を刊行しており<sup>25</sup>、著者の李珍宇論には、サルトルの文学理論の影響が窺われる。本稿の結論において著者は、犯罪者を「詩そのものである」と表現したサルトルの言葉に倣い、李珍宇を「文学そのもの」とであると表明した。そこには、盗みながら読み続ける少年に対する親近感もあったのではないか。しかしながら、作家でありフランス文学者であり、李珍宇の減刑嘆願書の発起人の一人でもある大岡昇平は、李珍宇の文学的感性について、きわめて冷淡な批評を残している。

少年の知能は高く、52冊の外国文学の翻訳書を盗んだが、小説「悪い奴」の出来栄から見て、彼が『ファウスト』や『罪と罰』を理解していたとは考えられない。少年の環境に指導者が欠けていたためだが、一つには外国文学は悪い環境にあって、少年の誇りの象徴にすぎなかったためである<sup>26</sup>。

なぜ少年に指導者が必要なのか。ここには、西洋に育てられた知識人の選良意識と「非行少年」に対する偏見が漂っている。とはいえ、大岡は作家であるから、創作への評価が厳しくなるのは当然であろう。李珍宇の外国文学への志向性に関する大岡と著者の見解の差は、李珍宇に接近した時期の相違と『罪と死と愛と』の受容の有無が要因であるのかも知れない。だが著者も大岡と同様に、「主人公を正当化する意思が透けて見える」<sup>27</sup>と

いう理由から、李珍宇が書いた小説「悪い奴」に否定的な評価を下している。著者が李珍宇に見出した「文学」とは、犯行に至る過程や事件後の心理を言語化する李珍宇の力量と文学的営為との同質性を指す。著者は、李珍宇が想像した犯罪を実行するのではなく、ジュネのように、想像する力を文学作品に結実させることを想起していた。

このように著者は李珍宇の文学的感性を強調しながら、「日本のジュネーまたは他者化した民族」の題名が端的に示すように、民族問題の観点からも小松川事件を検証した。李珍宇は、朝鮮人差別が構造化された日本社会で生きていくために日本名を名乗り、日本人化、つまり他者化を強制されていた。現実の世界で自らの主体が奪われたことを自覚していたがゆえに、李珍宇は想像の世界で現実を逆転させ、主体を確立せねばならなかった。もとより強制された他者化が常に犯罪に結びつくわけではない。それでも、小松川事件の根底には在日朝鮮人問題が介在していることが、ここでは明確に指摘されている。在日朝鮮人でなければ、李珍宇はこうした犯罪を行うこともなく、その意味で著者は、刑死した李珍宇を「無意味に命を落とした3人の犠牲者」の一人と呼ぶのである<sup>28</sup>。

趙慶喜は、小松川事件に関する日本社会、在日朝鮮人社会、韓国社会の言説を、同時代的文脈において読み直し、これらの言説の間に横たわる連続性と断絶性について検証した<sup>29</sup>。ここで趙は「日本のジュネーまたは他者化した民族」と『越境の時—1960年代と在日』を比較し、著者の関心が「民族的責任」から「共感」へと進んだ点に着目した。そこでは、著者の「共感」が、李珍宇が「特出した個性と文学的想像力を持った自己省察的な人物」であったがゆえに生まれたものであり、李珍宇の死後に出現するという「一方的な性格」を有する点が指摘された。

誤解をおそれずにいえば、李珍宇の普遍主義的思考の記録は、鈴木だけでなく日本の

<sup>25</sup> 『サルトルの文学』（紀伊國屋新書、1963年）。

<sup>26</sup> 大岡昇平「李少年は果たして兇悪か」『大岡昇平全集 15』（筑摩書房、1996年）、43頁。初出は『婦人公論』第527号（1960年10月1日発行）、初出題は「李少年を殺してはならない」であり『婦人公論』編集部によって付された。大岡は、小松川事件を「少年犯罪」の一例として論じており、「見て見ぬふりをするのは公正ではない」といった言葉は挟まれるが、在日朝鮮人問題という側面からの分析は少ない。大岡はこの文章を書くにあたって「責任があるので」、巣鴨拘置所に赴き李珍宇と面会した。そこで示される大岡の態度やまなざしは、李珍宇に対して、きわめて謙虚なものに思われる。

<sup>27</sup> 『アンガージュマンの思想』、387頁。

<sup>28</sup> 同書、383-384頁。3人の犠牲者とは、殺された2人の日本人女性と李珍宇自身を指す。

<sup>29</sup> 趙慶喜「「朝鮮人死刑囚」をめぐる専有の構図—小松川事件と日本／「朝鮮」、権赫泰、車承棋編『（戦後）の誕生—戦後日本と「朝鮮」の境界』（新泉社、2017年）、233-265頁。

文学者や思想家たちが自らの共感と感傷を引き出すのに適していたということである<sup>30</sup>。

在日朝鮮人という「他者」性から李珍宇を捉えようとした著者の意図とは逆に、日本人の論者たちは李珍宇の固有性を矮小化し、小松川事件を民族問題から普遍的な人間性の問題へと転回させていった。趙はここに、在日朝鮮人であることを「本来の属性の一つとして相対化することで、「人間」的な共感をはかろうとする日本の思想的基盤の脆弱さ」<sup>31</sup>を読み取っている。「共感」とは、著者自らが選択した言葉である<sup>32</sup>。想像する力に由来する著者の議論に対して、それが「自らの共感と感傷」に支えられた片方向的なものであり、著者の思い込みでなされた「アンガージュマン」ではないかという批判がなされるのは、不可避的なのかも知れない。「他者」を論じる著者の論考は、会うことのなかったファノンと李珍宇、最終的に絶交で終わる金嬉老を主題としたものであり、趙の述べる通り、現実には「疎通の一方方向性」上にあった。だがそれでも、「他者」へのまなざしと「他者」からのまなざしを共振させる双方向性の視座が著者の議論の基底にあることを見落としてはならない。そこでは、「他者」が「他者」でありながら、「他者」ではない。李珍宇を論じる大岡昇平の態度を見れば明らかなように、同時代の知識人たちには自らが抑圧する立場にあるという自覚が少なく、そのうえ抑圧された人々を自らの論理で解釈しようとした。それに対して著者は、抑圧された人々を彼らの論理によって理解しようとしたのであり、このような態度は、同時代の知識人とは明らかに異なるものであった。

### 3. フランツ・ファノンと金嬉老、あるいは世界を変革する試み

著者はフランツ・ファノンについて、アルジェリア戦争や民族問題を論じた文章のなかで部分的に言及するが、その生涯と思想を主題にした論考として、『アンガージュマンの思想』には「黒い〈開化民〉と暴力」<sup>33</sup>、『政治暴力と想像力—鈴木道彦

評論集一』には「橋をわがものにする思想」<sup>34</sup>が収められている。「黒い〈開化民〉と暴力」は3節で構成されており、1節によれば、第三世界に関する同時代の論考は、「主体喪失者」によって書かれたか、第三世界の問題を単純に日本の問題へと移行させたか、日本とは無関係なものと見做すか、という三つの手法から立論されていた<sup>35</sup>。このような単純化された議論には、日本で第三世界を論じる困難さが反映されている。ファノンの暴力論、革命論が、暴力と非暴力の図式的見解に解消されることを避けるため、著者は「黒い〈開化民〉と暴力」において、暴力論、革命論の検証のみならず、ファノンの生涯を辿り直しながらその内面性を探究することに力を注いだ。

「黒い〈開化民〉と暴力」の2節では、ファノンの生い立ちからアルジェリア革命に至る過程が論じられた。マルチニックの黒人は、自分たちを「開化民」、すなわちアフリカ黒人よりも文明度が高い人間であると認識している。しかしファノンは、エーメ・セゼールの「帰国」によって、「開化民」が白人にとって「他者」であり、黒人にとっても「他者」である、すなわち二重化された「他者」であることを理解した。そして著者はファノンのこうした状況を、同じ「開化民」であるルムンバと李珍宇に結びつける。ルムンバは「非暴力」、李珍宇は「想像力」、ファノンは「暴力」によって自己の復権を図るが、こうした各自の選択にはいずれも否定性が内包されている。ルムンバは白人の暴力とコンゴ部族主義の暴力を否定し、李珍宇は祖国と民族を否定した。ファノンの場合は、他者化された自らの主体であるが、失われた主体の回復を求めて普遍性を志向したファノンは、精神科医という職業を選択する。ついでネグリチュードに傾倒して西欧文化を否定するが、さらにネグリチュードをも否定することで、黒人であることを否定した。このような二重の否定を通して、逆にファノンは西欧文化と黒人であることとの葛藤を受け止め、内面化して生きる方向へと進む。

月号、掲載時の題名は、編集部の要請により「黒い知識人と暴力」となる、『アンガージュマンの思想』、389-418頁。

<sup>34</sup> 「橋をわがものにする思想」、初出は『フランツ・ファノン集』解説（みすず書房、1968年12月）。『政治暴力と想像力—鈴木道彦評論集一』、130-169頁。執筆は1968年8月から9月。

<sup>35</sup> 『アンガージュマンの思想』、390-391頁。

<sup>30</sup> 同書、247頁。

<sup>31</sup> 同書、248頁。

<sup>32</sup> 『越境の時 1960年代と在日』、68-69頁。

<sup>33</sup> 「黒い〈開化民〉と暴力」、初出は『展望』1968年3

3 節で著者は、アルジェリア革命と FLN への参加がファノンの暴力論を形成する契機となったことを指摘する。そこでの経験を経て書かれたファノンの著書『地に呪われたる者』<sup>36</sup>では、植民者の暴力的支配が貫徹した世界として植民地が捉えられ、そこで作り出された暴力によって、逆に被植民者が植民地の解放を成し遂げる。こうして「開化民」ファノンは、植民地主義を拒否し、植民地の暴力のなかで生きながら、民衆を解放する暴力を説いた。他方、ルムンバの非暴力主義への共感が示されるように、それは非暴力主義を包摂した暴力論でもあり、物理的な暴力を絶対視したものではなかった。ファノンが指し示す暴力は、植民地の最も恵まれない階級、すなわち農民にしか担うことができないが、暴力が実現されれば、それが彼らの全体化、普遍化の契機となり、既成の価値を転倒させる。ファノンは、こうした理論を前提としながら植民地支配への反対暴力に積極的に加担しつつ、革命後に構築するべきものとして、西欧ヒューマニズムとは異なる、新たなヒューマニズムを提示した。このような態度に、第三世界のイデオログたるファノンの真骨頂があると著者は主張する。ファノンのごとく、自らを全面的、暴力的に拒否した「開化民」だけが民衆の暴力の代弁者となりうるのであり、知識人たちは民衆の暴力に加担することで、西欧から与えられた普遍主義を斥け、その普遍主義を再構築し、真の知識人に至る。このようなファノンの知識人論は、サルトルが定義した知識人のラディカリズムと共振するものであった。

「橋をわがものにする思想」は、「黒い〈開化民〉と暴力」を「全面的にふまえて書き直された」<sup>37</sup>論考であり、著者自らが指摘するように「新しい視点」が示された<sup>38</sup>。すなわち著者はファノンの暴力論を論じるのみならず、『地に呪われたる者』を貫くファノンの関心が、革命の暴力を通して解放される「全的人間」の創造にあることを強調している。さらに著者は、西洋的価値観からの訣別と「全的人間」の創造というファノンの思想を世界的潮流のなかに位置付け、西洋社会の否認を根源とす

るファノンの思想とラテン・アメリカ、アメリカのブラック・パワー、ベトナム、フランスの 5 月革命を支える思想との同質性を示唆する。そして最後にファノンと日本の関係を説くが、ここでは、ファノンの思想を体現する者として金嬉老が選ばれ、金嬉老の抵抗の暴力がファノンの暴力論と通底する文脈に位置づけられた。

「橋をわがものにする思想」は 7 節に分けられており、1 節から 4 節までが導入部とファノンの生涯の解説に当たる。5 節が『地に呪われたる者』の分析であり、6 節ではファノンの思想が世界に拡散していく同時代的状況を描写し、7 節はファノンの暴力論を援用した金嬉老論となる。『地に呪われたる者』の解説として書かれた文章でありながら、最終節をファノンと金嬉老を比較する議論で締めくくるのであり、このような構成は両者に対する著者の関心の深さを表したものだといえよう。著者は、ファノンと金嬉老の共通点として、「文化的強制」を受けることで異民族との同化を渴望し、自己を疎外せざるを得ない「開化民」特有の経験を挙げている。

ファノンの革命論では、自らを悪い人間だと見做し、自己認識の解体がなされると同時に、人は革命へと突き進む。金嬉老は、国家権力と差別を否定する意志を手に入れ、ファノンの革命論を寸又峡で実践した者であった。植民地主義の暴力が金嬉老の暴力を誘発したのであり、それは部分的改良や理性による説得を拒絶する、価値逆転の暴力へと昇華する。敗北に終わるしかない暴力を敢えて選ぶという情動に動かされた金嬉老は、自らのうちに蓄積されてきた国家の暴力を国家権力に投げ返したのである。こうして金嬉老は、はからずもファノンの思想の継承者となり、自らの「暴力」と日本人「人質」によって国家権力を奪還し、「革命」を成し遂げた。著者は金嬉老を通して、日本社会においてファノンの思想が生き続ける可能性を見出したのであり、金嬉老の出現は、ファノンを知らない人々のなかから、自己の内なる国家から解き放たれた「全的人間」が次々と誕生していく未来社会の招来を予言している。金嬉老の暴力が世界変革を志向する試みとして把握されたことは、著者の未来への希望を示すものである。

著者によれば、「黒い〈開化民〉と暴力」は、「私

<sup>36</sup> フランツ・ファノン『地に呪われたる者』（鈴木道彦、浦野衣子訳、みすず書房、1969 年）

<sup>37</sup> 『政治暴力と想像力—鈴木道彦評論集—』、292 頁。

<sup>38</sup> 『アンガージュマンの思想』あとがき、430 頁。



自身が一個の「開化民」であるという自覚に立って書かれたもの」<sup>39</sup>であったが、しかし半年後に書かれた「橋をわがものにする思想」では、著者は自らを「日本語しか書けずまたしゃべれぬ」日本人の側に位置づけ直した。「橋をわがものにする思想」では、「開化民」が「他者の言葉を語っている種族」と定義され、「われわれは「開化民」と程遠い」ものであり、「われわれが日本人でしかあり得ぬのは自明である」<sup>40</sup>ことが述べられる。著者は、在日朝鮮人問題を論じていく過程で、言語と民族の相互関係について問題関心を深めていくが、異国での生活は、「他者」の言語で語らざるを得ない状況への関心をさらに加速させる契機になったと思われる。

こうして著者の自己認識は、1968年4月のフランス留学前に完成した「黒い〈開化民〉と暴力」と留学中に執筆された「橋をわがものにする思想」の間で、「開化民」から日本人へと変化した。著者は「橋をわがものにする思想」を書くことで、日本人の側に包摂される自らの立場をより鮮明に認識した。「他者」を抑圧する日本人の一人であるという自己認識は、克服すべき課題の当事者として著者自身を位置づけることになり、かくして著者と「他者」とは無関係ではありえず、著者は「他者」をめぐる問題を自らに関わる主題として検討せざるを得ない。そこには、傍観的な態度や啓蒙的姿勢は見られず、同時代の「主体喪失者」によって書かれた、第三世界と日本の関係を単純化した議論に対する批判とともに、「日本人であることによってすでに有罪なのだ」<sup>41</sup>という「民族責任」の強い自覚がある。著者は、「他者」たちとともに自己の変革を試みていけば、「われわれ」にも「全的人間」となりうる可能性が開かれていることを説くのであり、自らが「開化民」ではないことを表明し、「他者」と自己の間に存在する境界を明示しようとも、文学者として、あるいは「他者」のまなざしを受け止めようとする者として、常に「他者」の側にいる。

## 結論

ファノンと金嬉老においては、暴力への参加が

自己の主体性を獲得する手段となったが、李珍宇はまず想像の世界に入ること、現実の犯罪へと向かい、自らの主体性を作り直した。しかし想像が現実化したことで、想像の自由は崩壊し、主体性を失った李珍宇は再び「他者」へと立ち戻ることになる。想像力を起源とする李珍宇の犯罪は、彼に否定の民族主義を選ばせた日本社会を告発するものであるが、それだけでは「出発点」にしかならず、「変革の方向」を示したものではない。ここに否定性をもって世界に立ち向かった李珍宇と実践的な働きかけを行ったファノン、金嬉老の相違がある。このような議論の背景には、李珍宇、フランツ・ファノン、金嬉老、彼らの思想と生の軌跡を描き出すのみならず、内面的に把握しようとする著者独自の態度がある。そこでは、二重に他者化された自己を否定しながら主体の回復を渴望する「他者」たちの葛藤が、個別の問題と見做されることなく、それが民族の問題であり、抑圧民族として「われわれ」の問題でもあることが示唆された。李珍宇、フランツ・ファノン、金嬉老は、「われわれ」が差別に対する集団的無意識、内面化された国家意識を持つことを「われわれ」に理解させるとともに、それをどのように克服するかという課題を突きつけた。彼らは自らの生を賭けて、「われわれ」の目を見開かせてくれたのであり、こうして国家と「われわれ」を告発しながら、同時に「われわれ」が国家から解放される途を指し示したのである。李珍宇、フランツ・ファノン、金嬉老を論じるなかで著者が試みたのは、歴史的事実の解明ではなく、「他者」の精神の物語を紡ぎだすことであった。それは、著者の問題関心を追求することで構築された「他者」の物語であるがゆえに、著者の精神を描き出す物語ともなっている。かくして、「他者」の精神をいかに解き明かすかを課題とする著者の議論には、自己と「他者」の境界を乗り越えようとする著者の葛藤が刻印された。

著者は、日朝関係を出発点として日本の民族問題を意識化するのではなく、ヨーロッパを通して日本の民族問題を発見したが、その過程が「いささか滑稽なもの」<sup>42</sup>であることを自覚していた。こうした著者の体験が示唆するのは、戦前から戦

<sup>39</sup> 同書、430頁。

<sup>40</sup> 『政治暴力と想像力—鈴木道彦評論集—』、161-162頁。

<sup>41</sup> 『アンガージュマンの思想』、360頁。

<sup>42</sup> 同書、424頁。



後へと継承された日本社会の植民地主義的な状況であり、それは現在でも克服されていない未決の課題である。それでは「他者」と自らをつなぐ契機となる、西洋中心主義の否定と植民地主義の超越はいかにして成し遂げられたのか。1954年にフランスに留学した著者は、アルジェリア戦争に直面し、アルジェリア人、チュニジア人、フランス人の学生たちと民族を超えて連帯した<sup>43</sup>。フランス留学を契機として、西欧を否認する「他者」の声を受けとめる力を手に入れたのであり、こうした経験は西欧を相対化する視点を確立させた。著者はフランスに育てられた者でありながら、同時代のフランスの政治状況を体験した「フランス文学者」となったがゆえに、「絶対的な」存在としてのフランスから訣別せざるを得なかった、といえよう。こうして西洋中心主義を相対化した著者は、「第三世界」の人々が植民地主義の暴力から解放されることを望みながらも、彼らの次なる目標が近代国家の建設にあるとは考えていない。自己の内なる国家と対峙し続ける著者の関心は、「第三世界」のみならず全世界を変革し、「全的人間」の協働によって構築される新しい世界の実現にあり、このように著者の西洋中心主義の否定、帝国主義への批判は徹底していた。

著者は2011年に、金嬉老事件を紹介する短いコラムのなかで「民族責任」について再び論じている<sup>44</sup>。「民族責任」は、金嬉老事件が起きるまでは一部の論者が取り上げるのみで、左派政党や新左翼グループのなかでも欠如していた思想であった。金嬉老事件は、日本人が忘却していた「民族責任」に新たな光を投げかけたが、しかし高度経済成長を謳歌していた日本社会は、こうした主張を受けとめることなく、経済的な利益の追求に邁進していった。著者は「そうした醜い日本への反省」と「無反省史観」、「無責任史観」への抵抗原理として、「民族責任」が今後あらためて想起されるに違いないという。著者の半世紀を貫く関心に応えることが「われわれ」に出来るだろうか。

<sup>43</sup> 「太陽の影」『アンガージュマンの思想』、170-173頁。

<sup>44</sup> 「金嬉老事件」『岩波講座 東アジア近現代通史 第8巻 ベトナム戦争の時代 1960-1975年』(岩波書店、2011年)、212-213頁。